

「アクティブ・チャイルド・プログラム」でリーダーを積極的に活用することは、プログラムを盛り上げるためにも効果的です。

現在の子どもたちは横割り(学年ごと)の団結はありますが、縦割り(異年齢集団)で遊ぶ機会がほとんどありません。しかし、異年齢集団での遊びは、年上の子どもの行動を見習ったり、年下の子どもをいたわったりすることに、自然により動きの習得や社会性が育まれる場として非常に重要です。

そのため、団員と年齢が近い、リーダー(ジュニア・リーダー、シニア・リーダー)は団員の気持ちを理解して接することができ、遊びを盛り上げることが出来ます。



幼児と小学生がルールを守って「線上鬼」で遊ぶ

今回のプログラムでは、リーダーや育成母集団にも積極的に遊び教室に参加してもらい、幼稚園児(4〜6歳)と小学校低学年(7〜9歳)の異年齢集団が、一緒に楽しく遊べる教室をめざしました。

指導者が、遊びの先導役(プレリーダー)としてリーダーを活用するときに注意したいのは、まずリーダーが実践しやすい(遊ばせやすい)プログラムを選んで、任せることです。そして、リーダーの先導が始まったら、指導者も子どもたちと一緒に遊ぶことです。

指導者は、先導役をリーダーに任せきりにするのではなく、子どもたちと遊びながらリーダーをサポートします。リーダーは指導者のサポートを見て、子どもたちへの声のかけ方や雰囲気づくりの面で刺激を受けるはず。こうしたことが、リーダー育成につながっていきます。



〈指導者〉  
佐藤善人  
岐阜聖徳学園大学  
教育学部准教授



遊び教室に協力してくれたリーダーたち。左から高橋夕梨花さん、西依輝さん、西村太陽さん、叶山歩伽さん

### 大歳ジュニアスポーツクラブ

大歳ジュニアスポーツクラブ(山口県山口市)は2年前に設立された、ソフトバレーボールを中心に活動するスポーツ少年団。モットーは「誰とでもあいつ」「自分で決める」。和田康夫団長は「試合に出ることや勝つことは目的にしていません。子どもたちに体を動かすことの楽しさを伝えたい」と言う。練習は毎週日曜日2時間。月会費はファミリー会員制で、何人入っても1家族500円だ。



写真/山岡邦彦

### ムードが盛り上がった段階でリーダーが先導役をスイッチ

子どもたちを遊ばせてムードを盛り上げました。特に前半は、幼児だけで遊んで、心が十分に開放(アイスブレイキング)されました。そのため後半に入ってから小学生が参加しても、自然に異年齢集団が融合できたのだと思います。最初から幼児と小学生と一緒に遊ばせていたら、幼児たちは気後れし

てしまったかもしれません。そして、異年齢集団の融合が十分に進んだところで、指導者は先導役をリーダーへ引き継ぎます。このように、指導者はサポート役として、子どもたちを十分に盛り上げてからリーダーへ引き継ぐように心がけてください。

# リーダーの活躍により 異年齢集団が楽しく遊ぶ

指導の現場で「幼児期からのアクティブ・チャイルド・プログラム」をどのように実践していけばよいかをレポートする指導実践編の第4回。今回は、佐藤善人先生が山口県の大歳ジュニアスポーツクラブを訪ね、リーダーや保護者を上手に活用して、幼稚園児と小学校低学年の児童と一緒に遊べる教室を展開しました。



アイデアACP公開!

連載 第5回

幼児期からの

## アクティブ チャイルド プログラム

おもしろい、体を動かす、楽しさをみんなの子どもたちにつたえよう!

# in 大歳ジュニア スポーツクラブ

幼児編

大歳ジュニアスポーツクラブでの遊び教室。前半は年少(4歳児)から年長(6歳児)までの幼児を集めて開催されました。「だるまさんが転んだ」「なわ跳び遊び」と進むうちに、子どもたちは夢中になって遊ぶようになりました。

## 1 模倣遊び

「だるまさんが転んだ」の準備運動として、「模倣遊び」でポーズを作る練習。子どもたちの心を徐々に開放します。



## 2 だるまさんが転んだ

鬼は基点となる場所(壁や木)に立ち、「だるまさんが転んだ」と言ってから振り向く。子どもたちは鬼が振り向くまでの間に鬼に近づき、振り向くと同時に静止する。静止したときに、子どもたちが思い思いのポーズをとり盛り上がります。「だるまさんが転んだ」の発展例として、「だるまさんが……」のあとに動物の名前を言います。子どもたちは「動物」のポーズをとります。今回の教室では「ライオン」「つる」「ワニ」の3種類で行いました。



## 3 なわ跳び遊び

リーダーに参加してもらっての「なわ跳び遊び」です。最初はユラユラ揺らす「へび」を跳び越える遊びから。慣れてきたら波を大きくして行って、みんなで跳んで回数を数えます。



## 4 ボール遊び

大歳ジュニアスポーツクラブはソフトバレーボールが中心のスポーツ少年団だったので、ソフトバレーボールを使って遊んでみました。①上に投げてキャッチ、②上に投げ、拍手してからキャッチ、③上に投げて頭に当てる、④2人1組になってのキャッチボール、⑤転がしたボールをおしりで止める……いろいろなキャッチの仕方を工夫すると楽しくなり、多様な動きを引き出せます。



## 5 鬼ごっこ

子どもたちから「鬼ごっこをやりたい」というリクエストがあったので、すぐに採用しました。子どもたちを飽きさせないようにするために、次々とプログラムを展開させたり、子どもたちの意見を取り入れることも大切です。



# in 大歳ジュニア スポーツクラブ

◆ 幼児+小学生編 ◆

後半は小学生が加わって、異年齢集団による遊び教室が展開されました。大きな子も小さな子も一緒になって、体を動かすことの楽しさを体験。途中からリーダーが先導役を務め、「ひよこのたたかい」「猛獣狩り」「木とリス」と展開しました。最後はみんなで「大根抜き」など大盛り上がりの教室となりました。

## ② ひよこのたたかい

リーダーが先導役となつての「ひよこのたたかい」です。しゃがんだ姿勢で、両手で両足首をつかんで「ひよこのポーズ」をとります。そのまま、近くの人に当たって転がせれば勝ちです。



## ① 線上鬼

体育館の線(各種競技のライン)を利用した「鬼ごっこ」です。線の上しか動けず、早足での移動になります。幼児から小学生までいるので、普通の「鬼ごっこ」では衝突の危険性が高まります。「線の上だけ」という制約をつければ、衝突の危険は少なくなります。



線の上を  
早足で!



次に発展例で「ふやし鬼」。タッチされた子どもは鬼となつて、手を挙げたまま追いかけます。

## ③ 猛獣狩り

猛獣狩りへ  
行こうよ!



動物の名前の文字数だけ人を集めて、手をつないで早く座ります(例えばライオンなら4人)。ゲーム性を持たせたグループづくりの遊びを行うことにより、次の「木とリス」(3人1組)へのつながりをスムーズにします。

## ④ 木とリス

3人1組となつて行う遊びです。2人が両手を合わせて「木」をつくり、1人はその真ん中にしゃがんで「リス」になります。鬼となつた人の呼びかけごとに、子どもたちはほかの場所に移動します。



## ⑤ 魚とり

網を投げるぞー!



マーカーで仕切られたエリアの中を、鬼にタッチされないように片側の安全地帯から反対側まで走って逃げる鬼遊びです。子どもたちには走りたという欲求があるので、思いっきり走ります。

## ⑥ 大根抜き



みんなで大きな輪を作つての「大根抜き」です。子どもたちとリーダーが、一緒に盛り上げて遊び教室を終了しました。

# さまざまな年齢の子どもが多様に遊ぶ “昔の公園”のような雰囲気のある教室

指導現場レポート はしまなごみアクティブ・チャイルド・クラブ



マーカーコーンでコートを仕切ってドッジボール。佐藤善人先生も参加



子どもたちは2時間の遊びで汗だくなる



公園の広場を十分に利用して“手つなぎ鬼”



芝生にフープを置いてケンケンパー

## 「疲れた」と言うまで子どもたちを遊ばせる

「私たちが子どもたちによく遊んでいた“公園”のような雰囲気の教室です。“何時に集合ね”なんて約束して、いろいろな学年の子どもたちが集まってきて、さまざまな遊びを楽しむ場です」

“遊びの伝道師”佐藤善人先生が、はしまなごみスポーツクラブ(岐阜県羽島市)で開講する遊び教室が「はしまなごみアクティブ・チャイルド・クラブ(以下、ACC)」。

毎月第1日曜日の午前中2時間、近隣の小学校の体育館や公園を利用して開催されます。対象は幼稚園の年長組(満5歳)から小学校3年生まで。

「ただ、参加者に兄弟姉妹がいる場合は一緒に遊んでいます。実際は未就園児から小学校3年生までの異年齢集団で活動しています」

毎回の参加者は30人前後、男女の人数はほぼ半分ずつ。佐藤先生が子どもたちを集めて、安全面を確認することから教室はスタートします。その後は、ボールやロープ、フラフープ、体育館や公園の遊具を使ったり、鬼ごっこをしたりと、ひたすら自由遊びを展開。全員が同じ遊びをするのではなく、子どもが年齢や発達段階に応じて、個々でやりたい遊びを選びます。昔、どこの公園でも見られた、子どもたちの“遊びの風景”です。教室の終わり間際に、佐藤先生が子どもたちを呼び集めて、「どうだった?」と遊びの感想を聞きます。このときには、子どもたちはもう汗だくになっています。



遊び教室のスタート前に、子どもたちを集めて安全面の確認

「子どもたちが“疲れた”と言うまで遊ばせようと思っています。多様に遊ばせることをコンセプトに始めた教室なので、そこは保護者の皆さんも理解してくれています」

## 遊びは自由に、注意はきちり

“佐藤先生が見守るなか、自由遊びを楽しむ”がはしまなごみACCのスタイル。より自由なスタイルになったのは、佐藤先生が昨年度、ほかのクラブで開講した「遊び教室」での反省が生かされています。

「(昨年度は)遊ぶことが“仕事”のようになりました。2時間の開講時間で、“次はこれやるよー”と遊びを進めても、年齢が幅広いと動きのレベルがバラバラで楽しめず、子どもに“やらされている感”が生じてしまったのです。そこで、(今年度から)もっと自由な内容にしてみました。すると、子どもたちが遊びをさらに楽しくしようとするいろいろな工夫をするようになりました」

ある子が「先生、ドッジボールしたい」と言うと、佐藤先生は「いいけど、ドッジボールをしたい子を集めないといけないよ」と応えます。すると、その子が「ドッジボールしたい人!」と仲間を集め始めます。仲間が集まると、マーカーコーンでコートを準備し、ルール(約束ごと)を決め、ドッジボールが始まります。

「こちらで遊びを決めてしまうのではなく、“何かをやりたい”と言ったら、子どもたちに決めさせるようにしています。子どもは“その遊び以外はやりたくない”ということはあまりありません。“この遊びはやりたいけど、ほかの遊びでもいい”と思っているのです。次の遊びは我慢した子がしたかった遊びにします。遊びが決まったら、“ルールは?”という具合に、できるだけ子どもたちに選択させるようにしています」

佐藤先生は自由遊びを見守りながらも、運動の仕方がわからない子や、仲間の輪に入れない子たちに声をかけて一緒に遊びます。また、遊びの中でルール違反や危ない行為を見かけるときちり注意します。

「ルール違反や危ない行為をズルズルやらせると、ほかの子どもたちは楽しくなくなってしまいます。頭ごなしに叱ることはしませんが、指導者として言うべきことはしっかり伝えることが大切です」

写真/長尾里絵